

も皆と一しょに立てれば、またきっかけも出てくると思いある日「皆立ってごらんなさい。お背中のお骨がまがっていかないかしら?、先生に見せてね」と言いながら子どもたちの背をひとりずつ見てあるきK君のところへ来て何気なく「Kちゃんのはどうか」と背をさするようにして立たせてみた。すると立つことは立つようになり出した。

この頃K君と絵本を見ていて、私が「これ何かしら」と質問すると声にならない無声音で説明してくれました。それから数日すると、帰りのごあいさつの歌の時、頭をちょこんと下げるようになった。その翌日は、自由画の説明を始めて例の声にならない声でしてくれた。こうして一日一日と伸びてくるK君を見て、うれしくてならなかつた。母親にも連絡し、じっくりすること、K君に余りいろいろ言わずにいてほしいと頼んだ。

運動会には、はしるりレーなどには参加した。しかし、ゆうぎ、体操は全然しない。そこで「すずめ」のゆうぎの時、K君に

かかしになってもらい私と一しょに作った、みの傘をつけて中に立たせた。てれてもやっつてのけた。その頃ようやく共同製作に参加しました。

もうあとひと押しのところ、二学期が終り、三学期に入った。

三学期に入ると二学期の時の態度から全然後退せずほっとした。その頃のある日こんなことがあった。その日、非常にうれし気に入って来たK君は、例の声で「箱根へ昨日行ったんだよ」と話しかけ、車窓から見えた外の様子から、小石のことまで、こっと細く話してくれた。さらに「絵に描いて下さる?」と言うとすぐ応じて、紙にも黒板にも描きまくった。また年長組の先生にもその話をしたほどであった。ほんのちょっとしたこと、こんなにも喜び、そのことによって今までよりずっと親近感を示し進んで話しかけてくれたことは、きっかけがいかに大事なことか、ということを感じさせた。この事は家にも連絡したが、家の方でも喜び、これからもせいぜい機会を見

幼稚園は、子どもが家庭からはなれて社会生活をするはじめての場であり、また教育専門家の手にゆだねられる第一の機会なので、今まで気づかれずに過ぎてきたいろいろな問題が発見されることが多いようです。そしてまた、幼稚園での指導目標は、学習ということに集中せず、むしろ生活全般にむけられているために、幼稚園期は生活の問題を十分に指導出来る良い時期でもあるでしょう。

今、恵子ちゃんとK君の指導の記録を拝見して、こんな時期に熱心に導かれる機会を得た子どもの幸福をみて、忍耐強く努力を惜しまれぬ先生の指導に心を打たれました。

誰でも、どんな親でも、子どもが良くなるようにと心を悩まさない人はいないにちがひありません。それなのに、実際にはむずかしい問題が次から次へと起ってきたり、努力すればする程ますますむずかしくなってしまうたり、思いがけなかつたところに問題が育っていたりすることがあるものです。

恵子ちゃんの場合も、K君の場合も例外ではないようです。恵子ちゃんのお母さんもお祖母さんもお一生懸命に恵子ちゃんに良いようにと願っていたようですが、K君のお母さんも、思いがけぬK君のひっこみ思案にあせってしまっただけで一生懸命でした。それでも問題はますます

つけて出かけましょうと言っていた。その日、始めてリズムに参加したのである。

その日遊ぎ室で、皆とゲーム遊びをする、K君は参加した。これは良い機会と思いい、そのままピアノを弾き、あるいはいたり、はっきりなどの基本リズムをすると、そのままゲームの延長のように、にこにこして参加している。動作は不明瞭で、リズムに合っていないが、一応やっている姿を見てもう大丈夫と、何かしら重荷が下りたようであった。

これで、年長組になれば、ぐーっと大きく成長するだろう、と思った。この四月から年長組になったK君は、四月の半ば頃「へびがいたよ」と、登園してすぐ大きい声で報告してくれた。K君の本当の声を初めてきいたのである。男らしいかわいらしい声であった。それから大きい声で話し、また遊びもする。リズムやうたも、初めはてれくさそうであったが、じき元気になるようになった。年長組になりたてでまだ返事が出来ず(素直に出てこないで)、劣

等感をいだいてはいけなさと、ひかえていた出席簿を、「大きい声でお返事してね。きこえないとお休みになってしまうから」と、何気なく言い、読み上げたところ、K君は大きい声で返事をした。

ずい分長いことかかったが、やっぱりあせらずにやったことがよかったと思う。また母親も今ではすっかり喜んで、私共と協力して下さっている。そしてしみじみ子どもの教育のむずかしさというものが、わかったと言っていた。

結論として考えられることは、K君には、もって生まれた性格がずい分じやまをしていたようだが、あせらずに、きっかけを見出していったことが、K君の爲になった様である。

しかし私も、ついあせりたくなって、もっと早くよくなる点を、かえておくらせてしまったこともあるように思えて、そのことは深い反省となっている。

(小金井教会幼稚園)

むずかしくなっていたようです。ここに先生の助言と指導が、第三者として客観的に、そして愛情をもって忍耐強く引き込まれて、二人の子どもも自分ごとと直せました。子どもだけではなく、一家ぐるみと言えるでしょう。

私は相談室で、相談に来るお母さんの話を聞いたり、問題をもつと言われる子どもとの相手をしたりする機会をもつていますが、この一家ぐるみというところについても感じるのです。子どもに良かれと思つても、どうしても家庭の協力が必要なのですが、両親は大抵の場合それが適当かどうかを別として、私たち以上に子どもに良かれと願う気持と、家庭がうまくいくようにと配慮する気持が強いので、正しいと思われることを一生懸命に説明しなにかぎり、実行してはもらえません。こちらの協力する気持が通じて、親自身も新しい気持で、新しい方向に向かいはじめるまでがたいへんな仕事です。宮崎先生も武南先生も、そんなところに御苦労のあとがうかがわれるように思いました。子どもが浮かび上がってきています。大勢の一段が浮かび上がると、先生の目には次の子どもがたくさん問題を抱負いながら、一つ一つの問題を地道に処理してゆかれる先生がたの御健闘を心から願わずにはいられません。

(荒尾良子)